

**[翻訳] イェルク・ヴィクラム 『少年の鑑』 (1554年) (6)**

その他のタイトル	[Übersetzung] Jorg Wickram, Der jungen Knaben Spiegel (1554) Nr.6
著者	工藤 康弘, 田島 篤史, 吉田 瞳, 柴 亜矢子
雑誌名	独逸文学
巻	63
ページ	77-89
発行年	2019-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00018674">http://hdl.handle.net/10112/00018674</a>

[翻訳]

## イエルク・ヴィクラム 『少年の鑑』 (1554年) (6)

工藤 康弘・田島 篤史・  
吉田 瞳・柴 亜矢子 訳

はじめに

本稿はイエルク・ヴィクラム (Jörg Wickram) の『少年の鑑』 (*Der jungen Knaben Spiegel*, 1554) 本文第十四章、第十五章および第十六章の翻訳である<sup>1</sup>。本稿の二人の共訳者である工藤と田島は「大阪初期新高ドイツ語研究会」を発足させ、2014年3月より活動を始めている。本稿はその成果の一部であり、すでに本作『少年の鑑』のタイトルページ、献辞、本文第一章から第十三章と作品・作者の解説は発表しているため、関心を持たれた読者諸賢はそちらを参照していただければ幸いである<sup>2</sup>。なお2018年3月から吉田が、同年4月から柴が本研究会に参加しているため、今号から共訳者として加わっていることも付言する。

翻訳にあたり底本としてハンス＝ゲルト・ロロフ (Hans-Gert Roloff) の編纂によるヴィクラム全集を用いた<sup>3</sup>。またゲルトルート・ファウト

---

1 Wickram, Jörg: *Der jungen Knaben Spiegel*, Straßburg: Frölich, 1554.

2 工藤康弘・田島篤史訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)」、『関西大学西洋史論叢』第17号、関西大学大学院文学研究科史学専攻西洋史専修、2014年、20-32ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)(2)」、『独逸文学』第59号、2015年、231-241ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)(3)」、『独逸文学』第60号、2016年、101-114ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)(4)」、『独逸文学』第61号、2017年、133-143ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)(5)」、『独逸文学』第62号、2018年、33-44ページ。

3 Wickram, Georg: *Sämtliche Werke, Bd. 3: Knaben Spiegel; Dialog vom ungeratnen*

(Gertrud Fauth) およびミヒヤエル・ホルツィンガー (Michael Holzinger) による二冊の校訂版も参照した<sup>4</sup>。前者はヴィクラム研究の第一人者による校訂版であり、前書きと後書きにヴィクラムおよびその作品の詳細な解説が付されている。後者は1903年のヨハネス・ボルテ (Johannes Bolte) による一連のヴィクラム作品の校訂版を、ホルツィンガーが作品ごとに廉価なペーパーバック版で復刻したものである。このホルツィンガー版はコンパクトで参照しやすい反面、原典に収められている木版挿絵の一切が省かれているため、作品の臨場感といった点ではやや物足りなさを感じる。以上に加えてバイエルン国立図書館所蔵の初版テキストがオンライン公開されているため、そちらも適宜参照した<sup>5</sup>。

なお原典には章番号もコマやピリオドや段落の切れ目もない。ファウト版およびホルツィンガー版は独自に章番号を付し、文章を区切り段落分けをしている。本稿ではこれら二版の章番号に従いつつも、文章の区切りと改行は独自に行った。また本稿中に挿入している挿絵はファウト版の該当箇所をそれぞれの典拠としている。

---

*Sohn*. In: Roloff, Hans-Gert (Hrsg.), Berlin: W. de Gruyter, 1968, S. 1-121.

4 Wickram, Jörg (Verfasser), Gertrud Fauth (Hrsg.): *Der Jungen Knaben Spiegel; Mit dem Dialog: Eine Warhaffige History von einem ungerahnten Son.*, Straßburg: Karl J. Trübner, 1917; Wickram, Georg (Verfasser), Michael Holzinger (Hrsg.): *Der jungen Knaben Spiegel*, Berlin: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2013.

5 <http://daten.digitale-sammlungen.de/~db/bsb00008420/images/> (2019年1月2日アクセス)。

#### 第十四章

ロタールがブリュッセルから三マイルほどしか離れていないハレに行き、ある商人の袋を裂いて金を盗み、その金でそこから五マイル離れたデンゲンに来たこと。その商人にロタールが訴えられ、宿屋で見つかり、ついに捕らえられて吊るされたこと。



悪行や不埒な行為は、遅かれ早かれ報いを受けねばなりません。それはかのロタールの身にも及んだのでした。彼は働くことを好まず、喰らうは飲んだくれるのは怠惰な日々に慣れてしまいました。もはやロタールの代わりに勘定をしてくれる者などいませんでした。彼が遍歴で身につけた技に頼る以外で、このあわれな男は何をはじめのべきでしょうか？ブリュッセルにはもはや居場所はなく、また実家での「善き」行いのせいで、もはや帰郷することもかないませんでした。では彼は何をするのでしょうか？ロタールは自らのお得意の仕事にとりかかり、自分自身に語りかけました。

「ロタールよ、お前は別的手段をとらなけりゃならんぞ！このままで

は長くは食べていけないし、働きたくもない。そうなれば吊るされてしまうだろう。思い切って行動に移して、ハレである店の主人のもとで下男として奉公するんだ。そこで俺はほとんど苦勞もせず、良いまかないのついた怠惰な日々を過ごすことができる。かつての主人のもとにいたとき、下男たちがいつでも地下室の鍵を持っていて、ワインやパンを食卓に運ぶのを散々見てきた。あいつらしょっちゅうジョッキから一口いただいていやがった。もしある者があちこちお酌をして回ると、客たちはそいつにごちそうやたくさん酒を自由に飲ませるだろう。俺はこのことをやってみよう、そして肉屋はやりたい人に任せよう。俺はこの仕事に情熱はない。」

さてロタルはハレにやってきて、すぐさま善き雇い主である店の主人を見つけました。この主人は、神さまが自分に手を差し伸べてくれたと考えました。というのもこの悪たれは、心地よいと思うほどに調子のいい言葉でおだてることができたからです。ロタルは体つきもすらりとした好青年でした。彼ははじめこそてきぱきとしてもいたので、雇い主がとても信頼し、店の切り盛りをすべて任せたのでした。ロタルは自分の悪意を隠しておくすべを心得ていました。ですからよほど注意しなければ、彼の悪意に気づきませんでした。しかしほどなくして、ロタルがこれ以上ないほどに荒っぽいことが明るみに出たのです。

ご覧ください。ある日のこと、アントワープの大市に行こうと大勢の商人たちがハレにやってきました。そしていつものように、お金の入った袋を店の主人に預けました。主人はその金をだいじにしまうと、商人たちのところに座って、ともに楽しく過ごしました。皆は商人がいつもするように、おもしろい小話や、それぞれの家からここまでにあった出来事、良いことも悪いことも話しました。商人が大市に行くとき、時間をつぶすために、皆が気晴らしをします。ここでもそのようになされたのでした。

商人たちがとびきりの食事にありついているとき、彼らの仲間の一人が馬でやってきて、後から席につきました。彼は故郷でバタバタしていたのでした。その男は夕食を囲む仲間を見つけると、ロタルに馬を預け、つないでおくように命じました。そして自分の袋をとって、客間にいる仲間や同郷人たちのもとへ加わり、主人に袋をゆだねました。主人

は言いました。「旦那、どうぞおくつろぎください。わたくしが袋をお預かりいたします。」そのすぐ後にロタールがやってきました。主人はロタールに袋を保管するように命じました。ロタールはとても愛想よくすると、まるで主人の部屋に他の客たちの袋とともにしまおうとするかのように、袋と部屋の鍵を取りました。しかし彼は袋を階段下のガラタタの中に押し込むと、まるで万事がうまくいったかのように、主人の部屋の鍵を持って戻ってきて、それを主人に返しました。商人たちは皆だいたい酔っぱらったので、主人に明日のうまい朝食を命じて寝床に入りました。彼らは朝早くに起きるつもりはありませんでした。主人はこのことにとっても喜びました。こうして主人も客たちも、皆が楽しい眠りにつきました。しかしロタールはその夜長くは眠らず、自分の「仕事」に専念しようと決心したのでした。

さて家中が寝静まると、ロタールは金の入った袋をとって自分の寝室に運びました。彼は鋭いナイフを持っていたので、ぐずぐずせずに袋を裂きました。ロタールは中に大金を見つけました。それは純金でした。悪たれはそこから運べるかぎりの金をとって、自分の中で一番上等の服を着ました。そして夜が明けるとすぐに、家のみんなが起きる前に出かけました。彼は五マイル離れた次の目的地デンゲンへの道を行きました。そこでロタールはある宿屋に立ち寄り、自分が来たことを知らせないでくれとそこの主人に頼むと、盗んだ金の一部をやりました。主人は、うまい話がこの男と一緒にやってきたぞと考えました。というのも、ロタールがその主人のことをたいそう敬まったからです。彼ら盗人小僧はいつもこのようにしているのですが、そうでもしないと、たいてい誠実な人間とは見なされないのです。

さて、ハレでは主人と客たちが起きると、みんな下男のことを気にしました。しかし誰も彼のことは知りませんでした。主人にとっては困ったことでした。主人は自分の部屋の前へ走って行ってノックしましたが、返事はありませんでした。彼は思い切って部屋を開け、下男はいないかと隅々まで見ました。とうとう一つの隅に破れた袋を見つけました。主人はそれにえらく驚き、大きな叫び声をあげて言いました。「大悪党め、ひどいことをしやがって。」この叫び声を商人たちや家の他の奉公人たちも聞きつけました。彼らはこぞってやってきました。そこで

彼らはいたく嘆き悲しんでいる善良な主人を見つけました。彼は驚きのあまり立っていることもできなかったからです。

嘆いているのが袋のことだと聞くと、商人たちはみな一様にひどくうろたえました。というのも、誰もが自分の袋がやられたのではと思ったからです。ようやくその袋が一番あとにやってきた商人のものだということがわかりました。商人は駆け寄って自分の損害を確認しました。すると多額の金がなくなっていました。どうしたらいいでしょう。その善良な商人と主人は馬に乗り、二人で急いでデンゲンに向かいました。というのも、その悪党が門を通ったという通報があったからです。他の商人たちはその仲間にいたく同情し、悪党のことを何か知ることができないかと、みな同じように馬であらゆる通りに出ていきました。

主人と商人はデンゲンにやってきて探りを入れた結果、あの悪党がどの宿に立ち寄ったかがわかりました。彼らは馬から降り、自分たちもその宿に馬をつなぎました。その宿の主人は賢く分別のある男で、二人の様子から、彼らが困っていることを見て取りました。わけを聞くと、二人は事の次第を話しました。主人は言いました。「お二方、もう言わなくてよろしい、気を楽しんでください。力になってあげられると思いますよ。」こう言って主人は最近自分のところへやってきて、宿に来て一時間も経っていない客のことを話しました。その際、背格好や服装について述べました。これでハレからやってきた主人は、それがまさに探している少年だとわかりました。

さて彼らが話し合っていると、その悪党が階段を降りてきました。彼はハレの主人を見つけるとびっくり仰天して、逃げようとしました。しかし商人は先回りしてドアを閉めて言いました。「極悪非道な悪党め、ここで会ったが百年目だ。」ロタールは急いでひざまずいて慈悲を乞い、持っていた金をふところから出して言いました。「この金はまだ全然使っちゃいません、残りはここの主人が持ってます。」これに商人はとても喜びました。主人は残りの金を部屋から持ってきて、商人に渡しました。商人はようやく満足したようでした。しかしハレの主人は言いました。「いや、この悪党がこれ以上善良な人たちをおびえさせるようなことがあってはならない。これはあまりにもひどい。」

こうしてロタールは裁判官に引き渡されました。彼は現行犯で捕まっ

たので、すぐに拷問台につけられ、軽い拷問で彼は悪事を洗いざらい白状しました。そのような悪行が裁判官によって聴取されると、ロタールはすぐその日のうちにちっぽけな絞首台で吊るされました。こうして彼が求めていた「報酬」が与えられたのです。

ここであなたがた若い人たちは、父親と母親の言うことを聞かず、同じように学校の先生や後見人の言うことを聞かなければ、どんな「よい」ことが起こるか気づいてください。そういう人たちは目上の人に反抗的で、高慢な悪ガキに従い、彼らから何もよいことを学ばず、いかさまな博打やトランプ、詐欺、盗み食い、盗みに手を染めるような、ありとあらゆる悪事を学んでいるのです。こうしたものは、このロタールでよくおわかりのように、絞首台にふさわしい主だった行為なのです。この件はここまでにしておきましょう。

さて、悪い鳥ロタールが去ったあと、ヴィルバルトがどうなったかをまた見てみます。しかるのちに、主君や先生の言うことをよく聞く従順なフリートベルトとフェーリクスにどんないいことが起こったかについても語りましょう。

## 第十五章

**悪い鳥ロタールがヴィルバルトの前から去って行ったとき、ヴィルバルトはどうしたか。またフェーリクスとフリートベルトが自分たちの職務をまっとうしていたこと。**

さて次に哀れなヴィルバルトの話をさらに進めましょう。ヴィルバルトは名もない貧しいよそ者の少年としてブラバントに移り、食うや食わずの状態でした。もしお縄を頂戴すれば、ブラバントでの慣例通り絞首刑に処されるのではないかとひどく恐れていました。ここでは武装した騎兵たちが国中を駆け巡っていて、働こうとしない自堕落な子供たちを捕まえると、虫けらのように吊るしてしまおうのでした。その者たちのことをヴィルバルトはひどく恐れたので、どのようにしてブラバントから逃げだし、再び故郷に近づけるかということを実際に考えたのでした。ところがヴィルバルトは、母親が亡くなっていることを知らず、母親のもとに遣いをやりさえすれば、自分がそのような辛く惨めな暮らしの中



で時間を浪費しなくてもよいように、母親が必要なものを送ってくれるだろう、という希望をまだ持っていたのでした。



ヴィルバルトは長くさまよったあげく無一文になってしまいました。いくら彼が一生懸命お願いをしても、二つ返事で何か施してくれる人はおらず、皆お前は若くて丈夫なのに、なぜ働かないのかと言うのでした。こうしてヴィルバルトはたいそうお腹をすかせたまま、ヴェストファーレン、ついでザクセン、そしてブランデンブルク辺境伯領を通り抜け、ようやくプロイセンにたどり着きました。そこでヴィルバルトは、ある村で、家畜をたくさん所有している裕福な農夫のもとで奉公することになりました。ヴィルバルトは家畜の世話をすることになったのですが、それというのも、彼はひどくお腹をすかせており、その仕事を引き受けるしかなかったのです。こうしてヴィルバルトは貴族から豚飼いになりはててしまいました。しかしなぜそうなったのかについては、「100年の歳月が羊飼いを王様にし、逆に王様を羊飼いにもしてしまう」と古いことわざが言うように、読者の皆さまはこれまで詳しいことを聞

いているでしょう。良い家柄の貴族であったヴィルバルトは、今では豚やほかのたくさんの家畜の世話をしなければならなくなったのです。ヴィルバルトが徳の高い貴族のような志を求めているならば、他の者たちと同じくうまくやっていたでしょうに。

というのもフリートベルトは農家の出身で、羊飼いの息子でしたが、後ほど読者の皆さまが詳しく聞くことになるように、従順さと高い徳のゆえに大きな荣誉と尊敬を手に入れますから。また彼の主人は善意から、フェーリクスを自らの息子とフリートベルトの傳役として学校から引き取ったのですが、フリートベルト同様、彼もりっぱに出世し、教養ある男となりました。そのことを誰もいぶかしく思わなかったでしょう。というのも、私たちはそのような事例を今の時代たくさん目にしているからです。つまりどの大学でも、貧しい学生たちを寄付や奨学金によって支えるというのは、よくある慣習なのです。一般的に彼ら苦学生は高い教養を身につけ、博士や教授となります。それ以外の人は、つまりすばらしい食卓が与えられ、いつでもお金を送ってもらえるような人は、一体どのような人間になるのでしょうか。他の学位はもとより、学士になるのも難しいでしょう。こうした人たちは、たいていは努力して出世した人たちに奉公したり、彼らの召使いになったりするのです。親から受け継いだ財産をしばしば「勉強」でなくしてしまう主人よりも、苦学生たちははるかに優秀です。私が思うに、居酒屋でグラス片手にサイコロやカード遊びに興じたり、きれいどころを侍らしたりするような人たちは、本屋を富ませることはないでしょう。この話はこころへんにしておきます。

今やフリートベルトは二年ものあいだプロイセン宮廷の宰相を務めていましたが、妻をめぐってはいませんでした。ドイツ騎士団長は彼に女性をあてがおうと考え、すぐに思い浮かんだのは多くの財産と二人の美しい娘を残して死んだ先代の宰相のことでした。姉はコンコルディアといい、たいへん貞淑で温和な、頭のよい乙女でした。妹はフェリキタスといい、姉よりもいくらか美しく、あらゆる美德のうえでも引けを取りません。ある時、騎士団長は宰相フリートベルトに、結婚したくないか尋ねました。フリートベルトが答えるには、もし自分が、一緒にいて平和に楽しく暮らせるというような女性を知っていれば結婚したいが、結

婚生活で不安になるようなら、むしろ今ある自由を手放したくないし、おかしなかしまし女と所帯を持つくらいなら、善良で徳のある女性を逃すほうがはるかにまだ、ということでした。

この言葉に騎士団長は大声で笑い、ついでフェーリクスに同じように思うか尋ねました。フェーリクスは答えました。「いいえ。もし若者がみな同じ考えならば、それは良くないでしょう。さもなくば誰も結婚できないでしょうから。」フェーリクスは、人はみな苦しむために生まれてきたことをよくわかっていました。苦しまなければならないゆえに、フェーリクスは忍耐を持つとしたのでした。そして結婚生活がうまくいったならば、いっそう神に感謝しなければならないと考えました。そのためフェーリクスは、騎士団長が取りなしてくれるような、自分にふさわしい娘か未亡人がいるのであれば、良い忠告と支援、そして援助をもって助けてほしいとお願いしたのでした。騎士団長はこのことをフェーリクスに約束すると、すぐさま宰相の娘たちのことを思い浮かべて言いました。「我が親愛なるしもべよ、大船に乗った気持ちで下がってよい！明日の昼、再び私のもとに来なさい。私はお前たちのためになることを思いついたぞ！」

こうして宰相フリートベルトはフェーリクスとともに、主人である老騎士ゴットリーブのもとへ行き、大きな喜びをもって楽しい会話をしながら夕食をとりました。彼らは老騎士に騎士団長が話したことをすべて話しました。ゴットリーブはそれをたいへん喜びました。というのも彼は、二人にとって事態がうまく運ぶことをよくわかっていたからです。三人は食事をとり、主なる神を讃え感謝の言葉を述べてから席を立つと、素敵で心地よい庭を腹ごなしに散歩しました。やわらかで冷たい夕風が吹いて、きらめく星たちが夜を連れてくると、おのおの静かな寢床へ行き、甘い眠りのうちに夜を過ごしました。

## 第十六章

ドイツ騎士団長が宰相の未亡人と二人の娘に遣いをやったこと。彼らが互いに話し合ったこと。



翌日のことですが、騎士団長は昨晚とりかかっていた問題に決着をつけようと思立ちました。そこで、今は未亡人となった宰相の妻に遣いをやって、娘二人を連れてくるように命じました。女はカリタスという名で、慎み深く、主人に対してたいそう従順でした。ですから彼女は、騎士団長が善意から遣いを寄こしたことを十分に心得ていました。未亡人は立場をわきまえて清純な装いにしましたが、娘たちにはこれ以上ないほど美しく着飾らせたのでした。

三人はしとやかに騎士団長の前へやってくると、とても高貴に、そして恭しく敬意を告げたので、騎士団長はその振る舞いにたいそう驚いたほどでした。そのうえ三人はあまりにも艶やかな容姿であったため、誰も満足に視線を送ることができませんでした。妹のフェリキタスが先に行き、金色の髪が背中まで伸びた姉のコンコルディアが後に続きました。その髪は搔き上げると、まるでトルコで紡がれた金糸のように光り輝きました。頭には一粒のきれいな真珠の髪飾りと優美な花輪をつけていました。ふくらみのあるすべすべとしたおでこを、弓なりのほっそりとした眉毛が飾り、その瞳がどれほどつぶらで澄んでいたか、私には十

分に褒めたたえることなどできません。コンコルディアがその瞳を愛らしく使うさまは、とても言葉では表せません。

鼻はとても高いですが、尖りすぎではおらず、ほっぺたにはかわいらしい小さなえくぼがあって、愛らしく赤らんでいます。やわらかで快活な口は、惚れ惚れとするルビー色で、生まれながらの高貴さを授かり、下唇はわずかに上唇の前に突き出ている、その下には二重に割れたあごがありました。首はほどよい長さで、胸は優美でふくよかです。お腹まわりはとてもほっそりとしていて、その下の部位も素晴らしく均整のとれた体形でした。足どりも小さく上品で美しい姿をしていました。妹はわずかに小麦色をしていましたが、負けず劣らずの美貌をもって着飾っていました。

さて、カリタスが娘たちと一緒に少しのあいだ騎士団長のところにいたとき、騎士団長はすぐフリートベルトとフェーリクス、それに老騎士と側近たちを呼びました。彼らは恭しく現れました。騎士団長は彼らに過日フリートベルトとフェーリクスと話し合ったことをすべて話しました。というのも、彼の廷臣たちはみな二人の忠勤ぶりを毎日目にしていたので、それを全員に話す必要はないと考えたからです。それゆえ二人に異存がなければ、彼らにしとやかに美しい乙女をめとらせようと思うと話しました。なぜならば母親のカリタスも娘たちも自分の願いを拒否しないだろうという良い感触を得ていたからです。

このようなことを側近たちに話すと、騎士団長はしとやかに物腰柔らかなカリタスと呼んで言いました。「忠実で親愛なるしもべの奥方よ、そなたに遣いをやったのはそなたへの心からの好意と特別な慈悲の気持ちからである。これは幸せな思い出の中にあるそなたのご夫君が私にそうさせたのだが、彼は死の床にあってそなたと二人のご息女を心から私に託した。とりわけ私はそなたたちのとても誠実な父親になろうと思っているので、もしよければ、そなたの二人のご息女を礼儀正しく、まじめな若者にめあわせようと思う。彼らは徳の高さゆえ貴族と呼ぶことができよう。親愛なるカリタスよ、これについてそなたの気持ちを聞かせてほしい。」

善良な女性はこの大きな申し出に途方もない喜びを感じたので、うれしさのあまりどう答えたらいいかわかりませんでした。しかし少し考え

て騎士団長の足もとにひれ伏しました。騎士団長は彼女の手を取って起こし、一緒に椅子にすわって言いました。「カリタスよ、遠慮せずにそなたの気持ちを聞かせてくれ。」カリタスが口を開きました。「高貴で、崇高で、やんごとなき閣下、神さまに対しても閣下に対しても、私は多大なお慈悲と父親としてのお申し出を受けるに値しません。この世で我が愛する娘たちがこんなにも幸せな結婚をするのを見ることほど幸せなことはありませんか。でも私のような哀れなやもめにそのようなことはできません。しかしながら閣下がこのように父親としてのお申し出をしてくださるのであれば、娘たちともども閣下の庇護に身をまかせたいと思います。というのも、二人の娘はとても従順に育ててきて、どちらも私の意志に反するようなことはしないとわかっておりますので。それゆえとても慈悲深き閣下、あなた様の思し召しのままに。」

騎士団長は言いました。「それはよかった。私はこの結婚でも二組の父親になって、花嫁、花婿にすばらしい持参金を出してやろう。」こう言って騎士団長は立ち上がり、側近たちと隅へ行き、フリートベルトとフェーリクスを女性たちのところへ連れていって、二人に事の次第をすべて話しました。この善良な若い殿方たちほど喜んだ人はいるでしょうか。というのも、フリートベルトは以前は断っていたものの、美しくしとやかな乙女を目にし、彼女の上品な振る舞いを見るや、たちまち心変わりしたからです。

さてフリートベルトは騎士団長から詳しい話を聞くとすぐさま、もし可能なら美しくしとやかなフェリキタスを嫁としてお世話いただきたいと願いました。同様にフェーリクスももう一人のコンコルディアと結婚したいと望みました。騎士団長は大いに満足し、ただちに母親と二人の娘を呼び、自らの手でめあわせました。というのも、すべては事前に話がついていたからです。結婚式は良き日に定められました。この話はこれくらいにして、意気消沈した哀れなヴィルバルトが大きな難儀と悲惨と苦悩の中で日々の糧を求めなければならなかった様子に目を向けましょう。

